

感染症・予防接種レター (第23号)

日本小児保健協会予防接種委員会では「感染症・予防接種」に関するレターを毎号の小児保健研究に掲載し、わかりやすい情報を会員にお伝えいたしたいと存じます。ご参考になれば幸いです。

日本小児保健協会予防接種委員会委員長 加藤達夫

予防接種委員会

委員長	加藤達夫	岡田賢司	倉橋俊至	馬場宏一
	庵原俊昭	小倉英郎	小林清	綿谷靖彦
	遠藤郁夫	木村慶子	萩原誠一	

ワクチンの接種率を高めるための 対策について (集団接種の再考)

1994年の予防接種法の改正によりインフルエンザワクチンが任意接種となり児童生徒の学校での集団接種は中止された。定期接種として定められているDPTの2期(DT,トキソイド)の小学校6年生での接種,日本脳炎2期の小学校4年生での接種,日本脳炎3期の中学校2年生での接種も集団接種では行わず各家庭において児童生徒のかかりつけの医療機関で受けることになった。風疹ワクチンは中学2年生を対象に学校で集団接種が行われていたが猶予期間を経て中止となった。風疹は麻疹接種の後にを行うことを原則に12~90月未満が対象となったのである。

乳幼児期に行われる定期接種には, DPT, ポリオ, 麻疹, 風疹, 日本脳炎1期初回, 1期追加, その他BCGがあり, 任意接種にはインフルエンザ, おたふくかぜ, 水痘, 等がある。ワクチン接種は健康状態を見てかかりつけの医師に接種を受けることが望ましくそのために予防接種法の改正で義務接種ではなく個人の意向にそった接種が良いということになって集団接種が中止されたのである。

しかしながら現状は思ったような接種率が得られていない状況にある。ワクチン接種の重要性に対する認識が低いことが考えられる。

ワクチン接種を受けることによって各疾病に対する抗体を獲得した結果, 子どもの感染症を予防し, 小児の感染症による死亡率は激減した。ワクチンが子どもの感染症制御に果たしてきた役割は大きい。ワクチン接種の重要性について個人の認識をもっと高める努力が必要である。

一方, ワクチンは受けたいがなかなか時間が取れないこと, 学校を休んだり, 早退をしなければならないといった理由もあるようである。両親が働いている家

庭が多く, 家庭に代って学校での健康教育がよりいっそう求められる状況にある。学校で集団接種が行われ, 安心してワクチンが受けられれば親にとって有難いことかも知れない。児童生徒の健康状態をよく把握した医師で, ワクチンに関してよく勉強している医師のグループが丁寧に接種すれば問題は起こらない筈であり, 理想的な方法であると考ええる。集団の健康管理において, ある程度のワクチン接種率が得られていなければ, 疾病防御の効果は期待できないのである。特にインフルエンザのような大流行をきたす疾病に対しては, 一斉にワクチン接種を行って抗体保有率を90~100パーセント近く獲得しておく効果があることを著者らの調査の結果は示している¹⁾。

風疹に関する調査²⁾では, 小学生, 中学生, 高校生の抗体保有率を調査した。風疹ワクチン接種の本来の目的から高校1年生女子の風疹抗体保有率の推移について調べてみた結果を図1に示す。中学生を対象に義務接種としてワクチン接種を行っていた1996年以前は96%以上であったが最近では81~91%と顕著な低下が見られている。高校1年女子の風疹抗体陽性率の低下は憂慮すべき現状になってしまった。風疹ワクチンの必要性についての啓蒙が非常に重要である。

すべてのワクチンが安全に, 受けられやすくすることをもう一度考えてみる必要がある。

特に, 学童生徒が対象になっている定期接種については学校での集団接種として行われるほうが接種率を高める上で効果があると考ええる。集団接種を受ける際に学童生徒に対してワクチンの重要性について, また感染症予防について認識を高めるべく健康教育も含めた取り組みを行えば集団接種はさらに有意義なものとなる。もう一度集団接種の意義について再考してみる

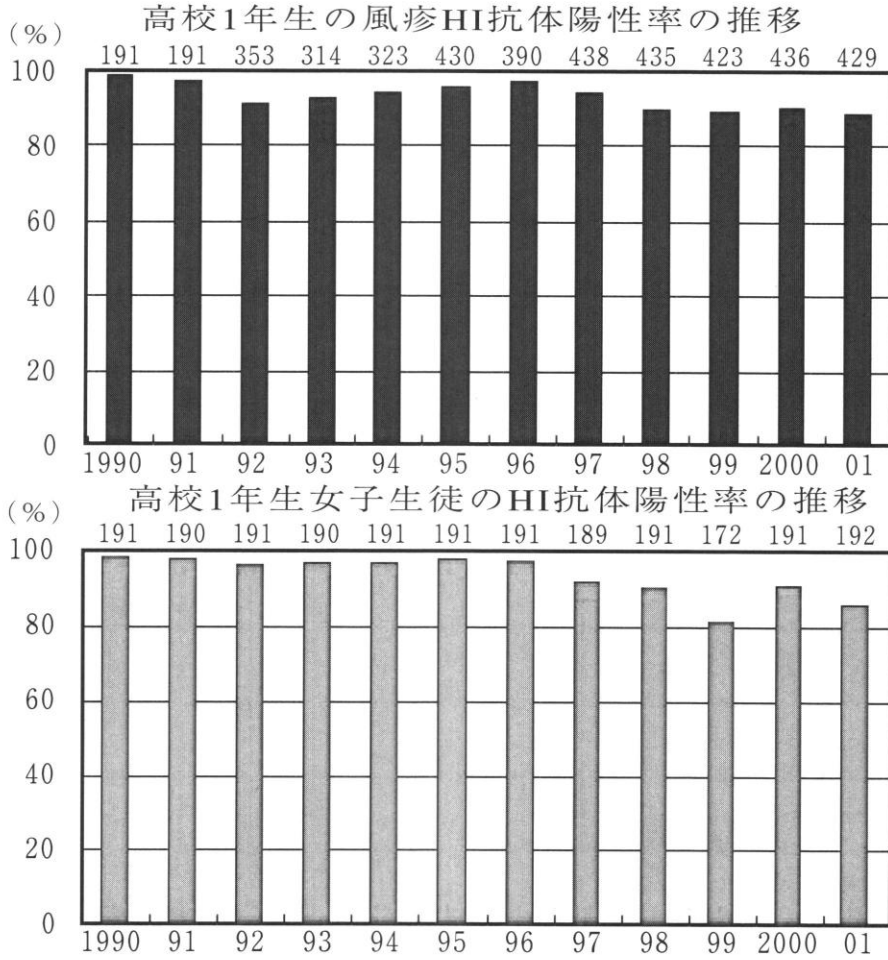


図1

ことも必要なのではないかと考える。

文 献

1) 木村慶子：インフルエンザの罹患調査 慶応保健研究, 20(1)：2003.6.

2) 木村慶子：1982年からの小・中・高新生生における麻疹，風疹の血清疫学調査．慶應保健研究, 21(1)：2003.6.

(文責：木村慶子)